廬・借廬の表現形態の整立

――挽歌と従駕随行歌の場合――

町方和夫

一、古今集時代以降の「廬」の整立

秋の田の刈穂の庵の苫をあらみ我が衣手は露にぬれつつ
後撰集　天智天皇

わが庵は都の巽しかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり
古今集　喜撰法師

右の二首は「いほり」「かりほ」の歌の代表作であるが、万葉集のそれを明弁するに先立って古今集時代以降のそれの傾向の大概についてすこしくふれておきたい。

冒頭の天智天皇御製とする歌は類歌性の面から、

秋田刈る借廬を作りわが居れば衣手寒く露そ置きにける
万葉集巻十

が口誦されていく過程で変化したものという推定説もあるが、上句の相異がおおきすぎることから簡単に口誦世界の異伝歌とみなすには抵抗を感じる。むしろ、

秋田もるかり庵つくりわがをれば衣手寒し露ぞおきける
新古今集巻五

のほうが万葉集の歌の異伝であることを示している。また、

秋の田の刈穂の庵の匂ふまでさける秋萩見れど飽かぬかも
後撰集巻六

は、

秋田刈る借廬の宿のにほふまで咲ける秋萩見れど飽かぬかも
万葉集巻十

の「宿」が「庵」に入れ替わっただけの同一歌に見えるが、それは万葉集の「高島の阿戸白波」の「廬悲しみ」が同集巻九で「宿悲しみ」とあるのと同様の影響関係であろうが、ともに内実は異質である。例えば、後撰集の蟬丸の歌の詞書「逢坂の関に庵室を造りて住み侍りけるに行きかふ人を見て」や、はじめにあげた喜撰法師の「わが庵」のように、古今集時代以降はある期間居住する「世のうき時の隠が」（古今集巻十八）とする草庵文学意識をもって、「山田もる秋のかりいほ」（同集巻五）や「山田かりそめ」（同集巻十六）に見られるように「刈り」と「おく露」の共通素材を二重に作用させて、現世を仮の世とする仏教思想と融合した新しい表現形態「刈穂の庵」を整立（「成立」とは異なり、従来の表現に新時代の思想

的影響が意識的に加味された新表現形態の定着をいう）したと考えられる。

このように、無常性の私的な居住意識の「隠が」に「草の庵」「葎生の宿」の草堂性が加わって、「わが庵」から外界の物象をとらえる主体性の詠歌態度が整立して、

我庵は小倉の山の近ければ憂世をしかとなかぬ日ぞなき

新勅撰集巻五八条院高倉

に至るのだろう。

万葉集の場合、すべての「いほり」は行旅の途次に作者がとらえた詠歌対象であって、居住意識に基づく外界の物象をとらえる主体性の詠歌態度は「わがやど」である。「高島の阿戸白波」の二首は長い口誦期間中の「廬」と「宿」の認識の混同がもたらした結果であろう。また、「家」は日常生活の基盤であり、行旅者の安全を斎い待つ女を思慕する行旅者自身の家郷意識の対象である。（注1）

だから、修辞上の「刈穂」と「苫をあらみ」の草庵居住の姿勢でうたった天智天皇御製とする後撰集の歌を万葉集の「借廬を作りわが居れば」の歌が口誦過程で変化したものとする推定は表現と時代性の関係を無視した不均衡な仮託といえよう。

二、用字と原義

用字についてみると、「いほり」の二十六首中「廬屋」「廬八」各一首、「布勢伊保」「麻宜伊保」一首（同一歌）、「田廬」二首、「垣廬」一首（「廬八」の歌）のほかは「廬」十四首（「苫手」を「廬戸」の誤りとする一首を含む）、「伊保里（利）」四首、「五百入」三首である。

「かりほ」は「借廬」十首、「可（加）里保」各一首、「借五百」一首である。字義からすると「何かも借りる廬」の意識が作用している印象をうける。後代の「かりそめ」の意識ではなさそうである。

「いほり」の原義を奈辺に求めるかというと、多数例の「廬」は漢字の流入・普及による技術的用字とみて、少数例の「五百入」「借五百」が「いほり」の本来性を伝えるものと考えたい。

「五百」の用例は枚挙に遑ないが、万葉集では「今夜の長さ五百夜つぎこそ」「神奈備山に五百枝さし」「白玉の五百都集ひ」等、記紀には「金鉏も五百箇（伊保知）もがも」「五百枝の賢木をこじ取りて、船の舳艫に立てて」等、また祝詞大殿祭にも用例があって、「いほ」は多数・繁栄・祈願の内実を持つ神聖表現語であったようだ。

また、和名抄には、

営　唐韻云営余傾反日本紀云和名伊保利軍営也

廬　毛詩云農人作廬以便田事力魚反和名伊保

庵室　唐韻云庵烏含反方言云覆草庵和名伊保草舎也

とある。これらをもとにして、大伴坂上郎女の「竹田庄にして作る歌二首」の

然とあらぬ五百代小田を苅り乱り田廬に居れば京師し念ほゆ

巻八の一五九二番

を考察の起点としていきたい。

この歌の「田廬」は巻十六の三八一七番の細注に「田廬者多夫世反」とあり、「五百代小田」の中に設営された「いほり」であろう。「五百代小田」は「五百」の「代」を収穫する「田」であろう。令

集解の巻十二の田令を見ると、「十段為町」として、

謂。段地穫稲五十束。束稲舂得米五升也。即於町者。須得五百束。

とあり、その釈に、

然則穫十段地。得稲五百束。成米廿五斛。名為町

とある。おそらく、「五百代小田」は五百束の稲を苅る田域であったのだろう。その田域の中に田事の便をはかる「いほり」を作ったために「五百入」と書き、五百束の稲束を収納する穂屋（稲小屋）であったのだろう。時代は四百年あまりをくだった平安時代も末頃になるが、藤原俊成の長秋詠藻の中に、「田の中に人の家ある所」の題で、

秋の田の五百代田より家居して千束や食稲積まむとす覧

とうたった歌がある。「家居」は本来山辺近くの家に住むことを言うのであるから、この歌の田は山里の田であろう。それゆえに、この歌の作歌姿勢は、五百束の収穫をあげる山田の田廬に住み暮して、五百束から一挙に二倍の千束の増収を目論む人の欲望を揶揄したものであろうが、背景には豊穣祈願の新穀供薦の古代思想(注2)と奈良時代の農業生産の田制とを反映した歌であるといえよう。

こうした事から考えて、「いほり」は、奈良時代においては、五百束の稲を収納する小屋の「五百入（いほり）であったものが、平安時代にはいっていくにつれて、収穫期の住居兼用の「宿」の過程を経て「五百入」の穂屋としての観念は農業社会を追われ、語としてのみの「いほり」が残存して、人里離れた世捨人の住む草庵を限定指示する表現形態を整立するようになっていったといえよう。

また、「かりほ」は前述の「いほり」の意義に一夜の時を明かすために借りる主体的意識を根幹にして、農事の「刈る」を連接した対格で把握していたのが奈良時代であったとすると、古今集以降は旅の仮眠の宿、仏教思想に根ざす憂世の「かりそめ」の宿であって、将来（来世）に期待をつなぐ主体者の処世上の一時期の住居意識に同音利用が作用して「刈穂の廬」「仮廬」の整立をみるようになったのだろう。

三、挽歌に表れる「いほり」「かほり」

(イ)「讃岐の狭岑島に、石の中に死れる人を視て、柿本朝臣人麿の作る歌」に、

……名くはし　狭岑の島の　荒磯面に　いほりて見れば（廬作而見者）　波の音の　繁き浜べを　敷栲の　枕になして　荒床に　自伏す君が　家知らば　行きても告げむ……

巻二の二二〇番

(ロ)狂語か逆言か隠口の泊瀬の山に廬せりといふ（廬為云）

巻七の一四〇八番

(ハ)「勝鹿の真間娘子の墓を過ぐる時、山部宿禰赤人の歌」に、

古に　在りけむ人の　倭文幡の　帯解きかへて　伏屋立て（廬屋立）　妻問しけむ　葛飾の　真間の手児名が　奥つ城は　こと聞けど……巻三の四三一番

(ニ)「菟原処女の墓を見る歌」に、

……虚木綿の　隠りてをれば　見てしかと　悒憤む時の　垣ほなす（垣廬成）　人の誂ふ時　血沼壮士　菟原壮士の　廬屋焼く（廬八燎）　すすし競ひ　相結婚ひ　しける時は……

巻九の一八〇九番

(ホ)「葛井連子老の作る挽歌」の左注を持つ歌に、

……秋萩の　散らへる野辺の　初尾花　借廬に葺きて（可里保
尓布伎弖）　雲離れ　遠き国辺の　露霜の　寒き山辺に　宿り
せるらむ　　巻十五の三六九一番

の五首六例が挽歌に見える用例である。

(イ)の「廬作而見者」は見る行為の主体者は作者自身であるから「廬」自体は(ロ)以下の「廬」とは内実を異にする。一面においては、むしろ、次の従駕随行歌の部の(ヘ)にあげた「乞食者の詠」の「廬作」と同一であろうから後でのべるが、この歌の「廬」は作者自身が「いほりする」状態を死者の「荒床に自伏する」状態に転化した同情の歌であり、表現対象としての「家」にそなわるところの家に斎き待つ妻を思慕する志向の内実を死者と生者である作者の心象とを一体化した歌である。その意味では「廬」は墳墓の廬でもある。

(ロ)以下は死者の在所を示す墳墓を示すものであるが、墳墓を「廬」視する思想は(ロ)の歌のあとに続く挽歌群に見える「入りにし妹」「過ぎにし妹」あるいは「わが背子は何処(いづく)行かめ」等から考えて、死を空間的に不明確な世界に設定して、いっぽうでは、その世界を時間的には現実の生の世界の延長線上に想定しては、死者を生者の心奥に更生せしめる思考、すなわち死の水平的他界観に基づいたものだろう(注3)。この歌の直前に「隠口の泊瀬の山に霞立ち棚引く雲は妹にかもあらむ」があるが、この歌と照合してみると、「廬せりといふ」は死者が完全に霊化するに至らない、つまり死者を仮に安置する殯のようなものをいうのだろう。播磨風土記印南郡に見ると、伊保山の由来が記してある。これは息長帯日女命（神功皇后）が帯中日子命（仲哀天皇）の陵墓を求める地名伝説であるが、

彼より度り賜ひて、末だ御廬を定めざりし時、大来見顕しき。故、美保山といふ。

とあり、「廬」は墳墓の石室をさすと考えると、この歌の類歌に「逆言の狂言とかも高山の巌（石穂）の上に君が臥せる（巻三の四二一番）をあげうる。沢瀉久孝氏はこの歌を根拠にして、(ロ)を「或本反歌とも見られるやうなものである。」とのべておられる。巌・石室・廬を同一視する傾向は古今集にも見えており、「いかならむ巌の中に住まばかは世の憂事の聞えこざらむ」とうたい、「隠が」の宿となっていく整立の過程を示している。(ロ)は「棚引く雲」となって垂直的に他界する前に、死者を生者としてもてなし、泊瀬の山に水平的に他界せしめたものである。

(ヘ)の「廬屋立」は「奥っ城」と同格であり、死後の同穴を願って帯をとりかわした悲恋物語の古伝説の地を「松が根や　遠く久しく」と念願した墳墓を訪ねて、忘れがたい感動を覚えて「君が臥せる」と同様の意識でもって、墳墓を生ける手児名の臥処としてとらえたものである。折口信夫氏は「婚舎として廬屋を立てて妻問ひしたといふやうな」(注4)とのべておられるが、死に臨んで若い恋人たちが死後結ばれる姿を想定して従容と死んでいった場所を「廬屋」とうたいあげたものであるから、作者の意識は「婚舎」の意識があったといえる。しかし、「廬屋」自体は墳墓である。「婚舎」の傾向が「廬庵」にみられるのは、伊勢物語第四十三段「庵あまたうとまれぬれば」が男女交情の場を示す代表的なものであろう。また、「かりねの床」（新古今集）も同系であったのだろうか。とにかく、「廬」には、墳墓の意味に伝説（悲恋物語）が加わり、婚舎の

意識がうまれて、中古時代にはいると、古代から揺曳し来たった婚姻の儀式の場的な、また「隠が」的な要素が伊勢物語等の交情の場を示すようになった歴史的な内実の変遷の一面があるようだ。ここに赤人の浪曼性があるといえるようだ。

(ニ)の「廬八燎」は修辞上は「すすし」にかかる枕詞であるが、「燎」の字義は木を束ねてやくのであるから、木製の寝棺におさめた死者を火葬にしたのだろう。かりに、棺自体が寝棺であったかどうかわからないにしても、「廬屋」は臥処でもあったのだから、対象捕捉時の意識は(ハ)の「奥っ城」から更に限定した寝棺としてとらえたのだろう。火葬にしたところで、菟原処女の古伝説の時代に火葬法がおこなわれていたと考える必要はない。作者と目される高橋連虫麿の時代は、すでに文武天皇紀に道照和尚の火葬の記があるところから一部には採用されていたといえる。そうすると、虫麿は古伝説の処女塚・壮士塚をみずからの時代に引きおろして、長歌の末尾で「新喪之如毛、哭泣鶴鴨」とうたいおさめたものと考える。井村哲夫氏は「今に通い、已れの心に通うものを見つけている虫麻呂の〃共感〃」(注5)と言っておられる。筆者とても「廬八燎」「新喪之如毛」に留意すると、虫麿は古伝説をみずからの時代に引きおろして生の息吹をふきこみ、伝説を現実化する詠歌態度でもって生の延長線上の死の世界に「黄泉に待たむ」と旅立てる処女の姿を設定して、競争的な二人の壮士の塚の「廬八燎」を修辞上の枕詞として「須酒師競」「相結婚」へと流れる連接から煤までが競争的な情景を垂直的な他界観でうたいあげたものだろうと考える。

(ホ)の「可里保尓布伎豆」はさきに掲げた古今集所収の「いかならむ巌の中に住まばかは」の歌や万葉集の三穂の石室に内在する石室即庵室観でとらえた「可里保」であり、死の世界を宇宙的時間の移行の中の水平的他界観でとらえた「可里保」であるから、死の世界への行旅の途次に借りる「かりねの床」であろう。すると、やはり、墳墓の「借廬」である。

ところで、この長歌には題詞も「或本」の注記もなく、作者名を伝えるだけである。先行の長歌には「壱岐の島に到りて、雪連宅満の忽に鬼病〈えやみ〉に遇ひて死去りし時に作る歌」の題詞はあるが、作者名を明記していない。沢瀉久孝氏は記録者自身の作とし、全注釈は一団の歌の手録者の作としている。そして、子老の挽歌のあとには六鯖の長歌・反歌がある。この三者の長歌・反歌の制作には作歌上の談合があって、作歌上の趣向を凝らしたふしがある。特に、先行の長歌と子老の長歌との間には、帰途半ばにして死去した宅満に捧げるために荘重にうたいあげる意図を持っていたのではないかと考える。

両者を比較してみると、先行歌の三六八八番は、

(イ)天皇の　遠の朝廷と　韓国に　渡るわが背は
(ロ)家人の　斎ひ待たねか
(ハ)正身〈ただみ〉かも　過しけむ
(ニ)秋さらば　帰りまさむと
(ホ)たらちねの　母に申して
(ヘ)時も過ぎ　月も経ぬれば
(ト)今日か来む　明日かも来むと
ロ〃)家人は　待ち恋ふらむに
イ〃)遠の国　いまだも着かず
イ〃)大和をも　遠く離りて

(チ)石が根の　荒き島根に
(リ)宿りする君

であり、いっぽうの子老の歌は、

(イ)天地と　共にもがもと　思ひつつ　ありけむものを（はしけやし）
(ろ)家を離れて　波の上ゆ　なづさひ来にて
(は)あらたまの　月日も来経ぬ
(に)雁がねも　続ぎて来鳴けば
(ほ)たらちねの　母も妻らも
(へ)朝露に　裳の裾ひづち
(へ′)夕霧に　衣手濡れて
(と)幸くしも　あるらむ如く　出で見つつ　待つらむものを
(ち)世間の　人の嘆は　相思はぬ　君にあれやも
(り)秋萩の　散らへる野辺の
(り′)初尾・　借廬に葺きて
(ぬ)雲離れ　遠き国辺の
(ぬ′)露霜の　寒き山辺に
(る)宿りせるらむ

というように、歌句を歌意の統一の面から構成上の句分けをしてみると、子老の歌は、先行歌を次のように具体的に継承していることになる。

(イ)(ろ)←(イ)　天皇の勢威・悠久性を負うて渡海する。
(ハ)←(ハ)　渡海中の時間の経過
(ニ)(り′)←(ニ)　季節の具体的表現
(ホ)(へ′)(と)←(ロ)(ロ′)(ヘ)(ホ)(ト)　家人の心境
(チ)←(リ)　死者への呼びかけ
(ぬ)(ぬ′)←(イ)(イ′)(イ″)(チ)　遠隔の地
(る)←　水平的他観界による臥処

というように、語句の概念上から区切ってみると、両者の間には長歌構成の因子それ自体に異質なものは存在していない。だが、因子の配列と詠歌態度に差異がある。先行歌は因子をやや無秩序に配列して第三者的な傍観的態度であるのに対して、子老の歌はそれを修正進展させる意図をもって同一因子の集合の配列と対句表現を駆使して、具体的で明確な秩序の構成でもって、死者の眠る「借廬」に秋の風物を供具した鎮魂歌の性格をうち出した主観的詠歌態度である。

しかしながら、この両首に欠如するものがあった。それを補足する意味で作った歌が六鯖の長歌であった。六鯖は先行の両首を模倣したわけでもなければ簡単にうたおうとしたわけでもない。彼は発想の根源を純粋に抽象の世界である天空に求めたのである。玄海灘の荒波を隔てとして現実世界と神仙的非現実の世界を対応させる認識でもって「恐き路」を通過せしめている。平安であれかしと希求する心情（苦悩）を卜占の行為で解消しようとしたのであったが、その結果は凶であったのだ。亀卜で有名な壱岐島の象灼きの煙に乗って天路を行く死者の姿は理想境に赴く、まるで地に足のつかない浮々した歓びの姿であるとみて、夢幻的な吉に転化した鎮魂歌であると考える。すると、先行歌が水平的他界観であるのとちがって、垂直的他界観を基調にしたものであるといえる。土屋文明氏は私注の中で「古歌を模倣したらしくもなく」といわれているが、この三長歌群の「今日か来む明日かも来むと家人の待ち恋ふらむ」「寒き

山辺」「妻も子どもも高々に」「恐き路」「空路」の表現は、巻十三の「調使首の、屍を見て作る歌」の歌群の「今日今日と来むと待つらむ」「恐き海を見渡りけむ」「妻も子どもも高々に」「恐き海」、「山道は行かむ……海路は行かじ」を作歌の基底にした高度化の表現であることは、子老が調使首の反歌をおのが反歌の二首に分割していることからもあきらかである。

四、従駕随行歌の「いほり」「かりほ」

(イ)「二年壬寅、太上天皇の参河国に幸し時の歌」の題詞を持つ歌群の一首、

暮〈よひ〉に逢ひて朝面無み隠にか日長く妹が廬せりけむ（廬利為里計武）巻一の六〇番

(ロ)「天皇、雷岳に御遊〈いでま〉しし時、柿本朝臣人麿の作る歌」に、

大君は神にし座せば天雲の雷の上に廬らせるかも（廬為流鴨）巻三の二三五番

(ハ)「冬十月、難波の宮に幸しし時に、笠朝臣金村の作る歌」に、

押し照る　難波の国は　葦垣の　古りにし郷と……味経の原に　もののふの　八十伴の男は　廬して（廬為而）都なしたり　旅にはあれども　巻六の九二八番

(ニ)「十二年庚辰冬十月、大宰少弐藤原朝臣広嗣謀反して軍を発せるによりて、伊勢国に幸しし時に、河口の行宮にして内舎人大伴宿禰家持の作る歌」に、

河口の野辺に廬りて（廬而）夜の経れば妹が手本し思ほゆるかも　巻六の一〇二九番

(ホ)「大宝元年辛丑冬十月、太上天皇大行天皇の紀伊国に幸しし時の歌」の歌群中に、倭には聞えゆかぬか大我野の竹葉刈り敷き廬せりとは（廬為有跡者）　巻九の一六七七番

(ヘ)「乞食者の詠二首」の一首、

おし照るや　難波の小江に　廬作り（廬作）隠りて居る　葦蟹を　大君召すと　何せむに　吾を召すらめや　明けく　わが知ることを　歌人と　吾を召すらめや　笛吹と　吾を召すらめや……　巻十六の三八八六番

(ト)「額田王の歌未詳」の歌は、左注に「右、山上憶良大夫の類聚歌林を検ふるに曰はく、一書に戊申の年比良の宮に幸すときの大御歌といへり。ただし、紀に曰はく、五年春正月己卯の朔の辛巳、天皇、紀の温湯より至ります。……」とあるもので、

秋の野のみ草刈り葺き宿れりし宇治の京の借廬し思ほゆ（借五百磯所念）　巻一の七番

(チ)「中皇命、紀の温泉に往しし時の御歌」に、

わが背子は借廬作らす（借廬作良須）草無くは小松が下の草を苅らさね　巻一の一一番

の八首である。

これら八首の歌のなかで、(ヘ)「乞食者の詠」は直接には従駕随行の歌ではないように見えるが、以下にのべる「いほり」の内実から判断して従駕に類する位置での作歌の口誦化したものと考えてよいと思うのでここに加えた。

そこで、まずこの(ヘ)から検討していきたい。乞食人は正史の伝える孝徳天皇・斉明天皇時代の才伎人に関係があるのではないかと思う。孝徳天皇は白雉二年十二月に難波長柄豊碕の新宮に遷居してお

り、翌々年には皇太子（後の天智天皇）は皇祖母尊らと共に飛鳥河辺行宮に遷居、その翌年には孝徳天皇病気のために、皇太子等は難波宮に赴き、大葬後再び河辺行宮に帰っている。このように宮居の選定さえ意のままにならなかった孝徳側と斉明側の根深い確執が孝徳天皇の恨死につながったのだろう。

この二派の覇権争いの状況の中で「廬作り隠りて居る葦蟹」を考えるべきであろうと思う。

まず、この歌の「いほり」は和名抄にいう「軍営」である。神武紀に「別処に営す」、壬申の乱の紀に「飛鳥寺の西の槻の下に拠りて営を為る」「橋の西に営りて、大きに陣を成せり」とか、また(ハ)の「八十伴の男は都なしたり」の事例を参考にすると、才伎者集団は単なる伎芸人集団ではなくて、難波長柄豊碕宮に近い葦の茂ったあたりに軍営としての廬を作って駐留していたのだろう。つまり、「垣廬なす人」であったのである。神代紀第十段に、火酢芹命が「汝の垣辺を離れずして、俳優の民たらむ」。といい、皇極天皇紀四年の入鹿誅伐に際して「俳優に教へて、方便りて解かしむ。」とあるところから、彼等は禁裏近くに「いほり」を作って城柵としての垣廬に住み、裏面工作や情報活動をおこなったものだろう。

ところが、両派の覇権争いが混迷の度を深めるにつれて、彼等は困惑と心痛のままに両派に忠誠の活動をせざるを得なかったわけである。その心理的苦痛の状態が蟹の横這いの譬喩表現をうみだし、「葦垣」と「葦蟹」の類音が「廬作り隠りて居る葦蟹」を整立させたのであろう。左注の注記者が「蟹の為に痛を述べて」としたのは、才伎者集団の苦衷を自ら慰撫した歌であることを明言することを回避したものといえよう。

この「廬作」は「廬＋(乎・者)＋作(造)」の七首の中で、前述のように「軍営を張る」の意味を内実とする用字はほかに挽歌の部にあげた(イ)の人麿歌と、この部の(チ)「借廬作良須」の中皇命の歌だけである。

挽歌部にあげた(イ)の「廬作而見者」は従駕随行時の軍営にある時に自己を第三者の位置におき、軍営にある自己と対比して石中死人をいたんだ歌ということになる。「石中死人」を岩石の間に横たわっている死人とする説もあるが、これは舒明天皇紀即位前紀の「墓所の廬を壊ちて」とあるところから廬即石室の発想にもとづき、墳墓に臥す死人とみるのが妥当である。これは、人麿が生の世界の軍営にいる自己の姿と廬即石室に臥す死者の一体化をはかり、「家」の思想であるところの「家に斎き待つ妻」を思慕する形（注6）に止揚した歌であるといえよう。

(イ)の「暮に逢ひて」の歌は「隠り」と「廬利為里計武」を中世風に草庵とする解もあるが、これとて軍営である。「隠り」は八坂入彦の女弟媛が「竹林に隠る」や播磨風土記の南毗都麻の話から考えて、長皇子と共に行幸に随行した妻は巫女の性格を持って本営近くの軍営の中に「いほり」を持ったのだろう。それに通過地の「なばり」を重ねたと考えたい。それが慣用的に序詞化したのだろう。「日長く」には巫女の性格から解放される日を待遠しく思い、逢いたく思っていた気持が過去推量の「けむ」を導き出したのだろう。長皇子が都に留まって随行中の妹を恋慕したり、新婚の一夜あけた朝の妻のはじらいは行幸という状況下にふさわしくないのではなかろうか。

(ハ)と(ニ)は行宮の近くに軍営を張って殷賑をきわめている（いた）

状況下の孤独感をうたったものである(注7)。(ニ)の家持の歌は大伴坂上郎女の「いづれの野辺に廬せむわれ」に答えたものであろう。ただ異なるのは、郎女は「田廬」をとらえ、家持は「軍営」をとらえているのである。彼は軍営にあって、人麿の遠妻をしのぶ思いや紀女郎(小鹿)に贈った歌のように、現実に逢うことの不可能な状況下でせめて夢にだけでもの恋情を常套表現の「手本に纏き寝」に託して、実際は妻の大嬢に贈った歌といえる(注8)。

(ホ)の「倭には聞えゆかぬか」の歌は直前の「背の山に黄葉常敷く神岳の山の黄葉は今日か散るらむ」に対立する歌である。「背の山」の歌が黄葉をしきつめて行幸を祝う歌であるのに対して、この(ホ)は竹葉を敷いた質素な軍営にあって、社会不安の危惧が心底にわだかまっているのである。続紀によれば、大宝元年八月は「田園損傷」「大風壊百姓廬舎、損秋稼」の民生恐慌の時であり、行幸に供奉した作者は「いほり」に竹の葉を敷き、その呪性にすがって、くる年の豊穣を神に祈らないではおれない心境を「常忘らえず」にいることを、倭の国の人々にむかって語りかけているのである。

(ロ)の「雷の上に廬らせるかも」は行宮、禁裏の近くに軍営を張るのとは違っている。直後の「哉る本に曰はく」の異伝歌の「王は神にし座せば雲隠る雷山に宮敷きいます」を併記している。「天雲」と「雲隠る」、「廬」と「宮敷き」の二点が相違するところで、「雲隠」を「雲隠り」と訓めば弓削皇子の薨去の時の置始東人の挽歌の反歌「王は神にし座せば天雲の五百重が下に隠り給ひぬ」と同じ発想になり、天皇崩御時の大后の歌にあるごとく、朝な夕なに神岳の黄葉を賞美されていたことから、天武天皇の御霊の御在所(陵墓)とすることも可能であるが、巻三雑歌の巻頭歌であるから、編纂意図から考えて田沼を京師とする絶大な権力の賛仰歌であろう。

すると、雷岳に廬する事は何を意味するのであろうか。まさか、雄略紀の「神の形」の蛇を見るためではなかったろう。神武天皇即位前紀に、天香山の埴で厳瓮〈いつへ〉を作り、粮〈おもの〉(厳稲魂女〈いつうかのめ〉)を嘗〈たてまつ〉り、兵を勒〈ととの〉へて八十梟師〈やそたける〉を撃つ話や、崇神紀の忌瓮を武蔵坂〈たけすきさか〉に鎮坐し、精兵を率いて那羅山に軍する話や豊城命が御諸山で弄槍〈ほこゆけ〉、撃刀〈たちかき〉するのに対して活目尊が縄を絙(は)えて粟を食う雀を追う夢占の話から考えて、三諸山も香具山も神武紀の「霊畤〈まつりのには〉」の鳥見山と常陸風土記の「筑波嶺に廬りて妻なしに…」や新嘗の夜の客人来訪の伝説とは根本的には同じ性格を持つのであって、祖霊をまつり、新穀の稲をそなえ、神と食事をともにして豊穣を祈り、そして軍旅についたものと考えられる。

こう考えると、雷岳は現在言うところの雷丘かうか疑問になってくる。むしろ、神岳三諸山とみて「霊畤」を設け、天下を平定する行宮を設営した天皇の事蹟をたたえたものと見るべきであろう。「雷岳」の「伊加土」は厳稲魂〈いかのうか〉の土〈つち〉、厳香土〈いかかぐつち〉の約であって、神聖な田、神聖な埴土を意味する「霊畤」の山を指すのではないだろうか。

(ロ)の「廬」は出陣に先立って豊穣を祈る「霊畤」の軍営であったものが、異伝歌においては忍壁皇子の御霊の在所に変改したものだろう。

(ト)の「宇治の京の借廬し思ほゆ」は「額田王の歌」の標記の下に「未詳」の二字が見える。この「未詳」は作者に疑問ありとするの

か、作者の出身を不明とするのか。また、左注から類聚歌林の孝徳天皇説、日本紀の史実による皇極天皇説・斉明天皇説がある。いずれにしろ、単独では立論できない。まして、左注の史実は春であるのに歌は「秋の野」とあって一致しない。それで「未詳」の語は左注の史実と深いかかわりを意識して追記されたものだろう。思うに、左注の竄入が孝徳天皇・皇極天皇・斉明天皇を予想せしめる結果となり、標記の作者名を「未詳」とせざるを得なくなったのではなかろうか。

それでは左注の本来あるべき位置はどこであったのだろうかと疑問を出してみたい。それは額田王の歌群の直後に続く(ヘ)の歌を含む中皇命の三首の左注であろう。中皇命の歌群の注は「天皇御製歌云云」で終っている。「云々」を「前出」「万人周知」を意味するものと考えると、(ト)の左注は本来は中皇命の歌群の左注であったのではなかろうか。そうなれば、「紀温湯」と「紀温泉」は一致するし、「未詳」の意味も同一の左注も分割したものとみて作者を中皇命とする含みを持ったものではないかと考える。

さて、前記のように左注の分割竄入を前提として額田王の歌とする(ト)の「借廬」の内実を考えると、従駕随行の歌ではなく、遊猟歌であろう。それは、天皇・皇子であれば、馬を並べ弓弭の音を響かせて悪霊を祓い、豊穣を願う行為の目的があるが、女身の額田王は秋の刈入れを終えた五百代小田に新嘗屋式の廬を作り、おそらくは田廬を修復したものだろうが、その中に真木柱または黒木の柱を立てて（注9）神招ぎをして豊穣感謝、くる年の豊穣祈願をしたものだろう。「宮子」は遊猟期間中の行宮であろうから「借五百(借廬)」と同格であって、京域の中の借廬ではないだろうと考える。

(ヘ)の「わが背子は借廬作らす」の歌は、先にも触れたように、左注の「云々」が(ト)の「宇治の京の借廬し思ほゆ」の左注を指すものと考えると、中皇命は斉明天皇自身であるといえよう。周知のように、斉明天皇は四年五月に皇孫建王の殯を起てて収める時に三首の挽歌を作っており、また十月の紀温湯行幸に際しては追憶の歌三首を作っている。そして、十一月に有間皇子の刑死。この事件は斉明天皇の全く関知しなかった衝撃事であったのだろう。事件後、その顚末を知った天皇は帰路の磐代の岡で愴爾悲泣の心情を述べた鎮魂歌二首を作り、皇子を生者としてもてなし、「結びてな」「刈らさね」と語りかけることによって、「わが代」の安泰を祈願したものであろう。この二首の鎮魂歌に紀温泉滞在中の御製を加えて、編纂者は斉明天皇流の三首構成の「往于紀温泉之時御歌」の歌群とする意図があったと見るのは不都合であろうか。このように考えてくると、「君が代」も「わが背子」も有間皇子をさすことになり、「借廬作らす」は舒明天皇即位前紀の「墓所の廬を壊ちて」や大化二年の墓制改革の「不得営殯」などから「営殯」をさすものであるが、非業の刑死にあった皇子を悼む心情から「廬作」の「軍営を張る」意識でかたりかけたものであろう。したがって、筆者が鎮魂歌とした二首は題詞にこだわることなく挽歌に加えるべき性質の歌になる。

注1　拙稿『万葉集歌素材観――家をめぐって――』日本私学教育研究所紀要8～10号

注2　高崎正秀氏『刈借廬考』を参照

注3　拙稿『死を託する歌――「過ぎにし（人）――』古代文学15号

注4　『真間・廬屋の昔がたり』国学院雑誌昭和27年4月号万葉集研究一千年特輯号(1)

注5　『憶良と虫麻呂』所収の「若い虫麻呂像」

注6　伊藤博氏『伝説歌の源流』国語国文昭和39年3月には「死人の家族（家郷）に思いを馳せることによって、死人を傷んだものである。」という。

注7　白雉元年に「味経宮に幸し」とあるから、味経宮の旧跡を通った際の軍営であろう。

注8　北山茂夫氏『大伴家持』は、大嬢との交情の復活を天平十一年八月頃とする。

注9　「真木柱つくる杣人いささめに借廬のためと造りけめやも」（巻七の一三五五番。「はだすすき尾花逆葺き黒木もち造れる室は万代までに」（巻八の一六三七番）などがある。『万葉集歌素材観(I)』にふれておいた。